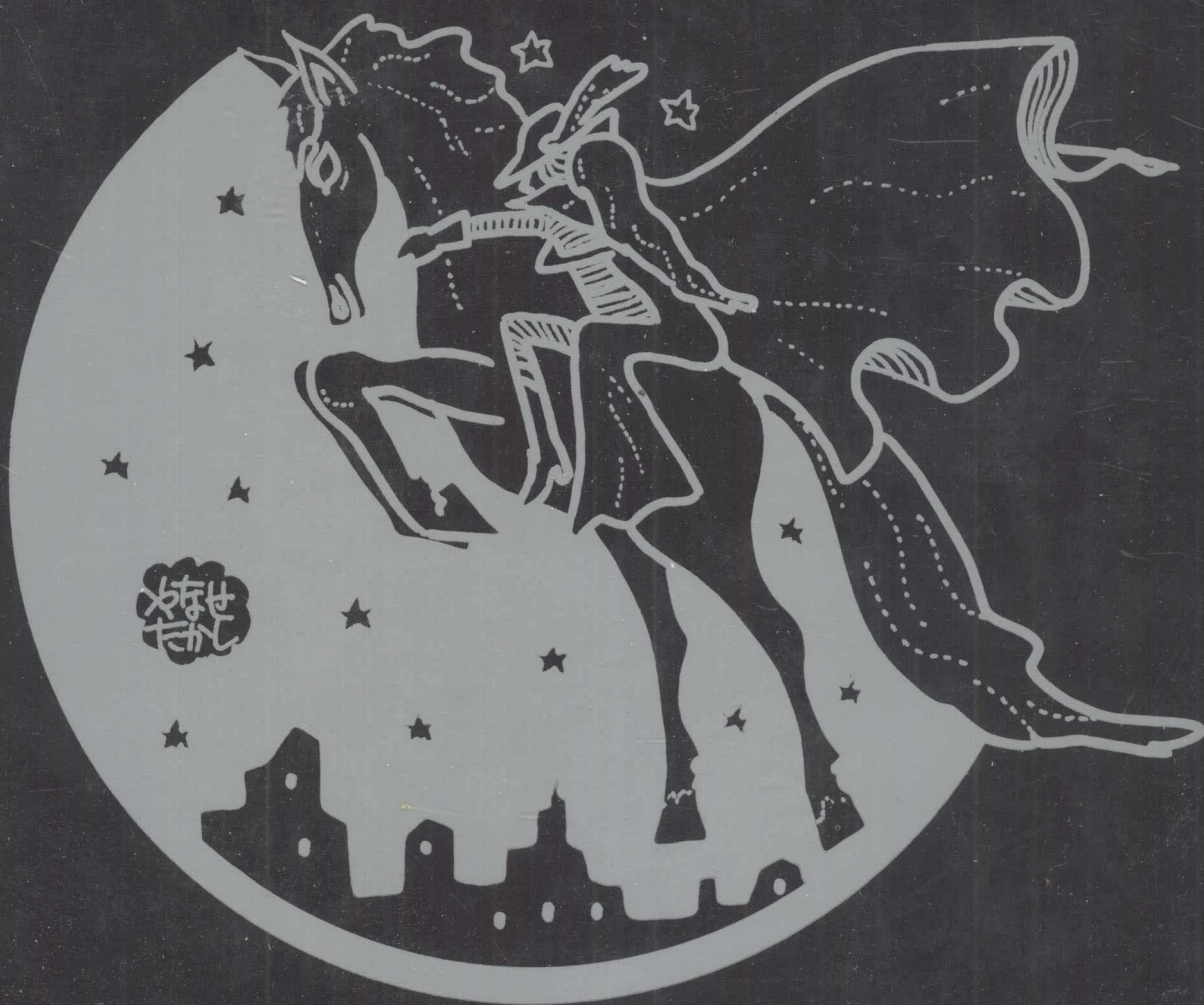


幻想短編小説集

夜霧の騎士

やなせ・たかし



あとがき

本当のところをいうと、ぼくにはメルヘンというのはよくわかりません。幻想小説あるいはS・Fといった分野があり、またグリム、アンデルセンといったような児童読物がありますが、大好きではあってもぼくのものとはちがうのです。我国では幻想小説やメルヘンが不当に低い評価をうけているのに、さらにその枠外で勝手な仕事をしているので、なんのためにこんなことをしているのか、自分でも理解にくるしみます。一種の絵ばなしメルヘン、あるいは漫画入り幻想短編小説とでもいうのでしょうか、しかたなしに「やなせメルヘン」ということにして、他の真実のメルヘンに迷惑を及ぼさないようにしています。ただみとめるひとは世界中にだれひとりいないというところが、心ぼそくもまたうれしいところで結局あなただけがたよりです。

夜霧の騎士

発行・1979年9月1日

著者・やなせ・たかし © 発行者・辻信太郎 発行所・株式会社サンリオ
東京都品川区西五反田7の22の17TOCビル5F 電話・東京(494) 5369

定価880円 印刷製本・(株)東京印書館

乱丁・落丁は当社にてお取りかえます。

(分)0095(製)79029(出)2831

幻想短編小説集

夜霧の騎士

やなせ・たかし

PART I 夜霧の騎士

PART II すみれ色交響曲

PART III 霧野仙子

はじめに

——やなせ・たかし

ほんのみじかいメルヘンばかり

どこからともなく気まぐれに

とりとめもなくひろい読みしてください

おもいもかけず不意うちに

ここにしみる一編も

もしかすれば

ありやなしや



目次

PART I 夜霧の騎士

・夜霧の騎士……………	8
・タイム・スイッチ……………	10
・セロリ4号消失事件……………	12
・銀色のひと……………	14
・海の少女……………	16
・海の巨人……………	18
・トンネル……………	22
・コンドルの眼……………	24
・ブスノン液の悲劇……………	26
・ペンキシーの漂流者……………	28
・人魚伝説……………	30
・まちがいさがし……………	32
・えくぼ泥棒……………	34
・耳の中の声……………	36

PART II すみれ色交響曲

・すみれ色交響曲	40
・燃えつきたローソク	42
・ボート・蟹・燈台	44
・チエツクの縞馬	46
・星降り峠	48
・マンホールのサンタクロース	50
・のどぼとけ	52
・茶色の詩集	54
・水仙の勲章	56
・椿	58
・幸福売場	60
・織細孤児	62
・風の中のエレ	64
・最後の箱	66

PART III 霧野仙子

・霧野仙子	70
-------	----

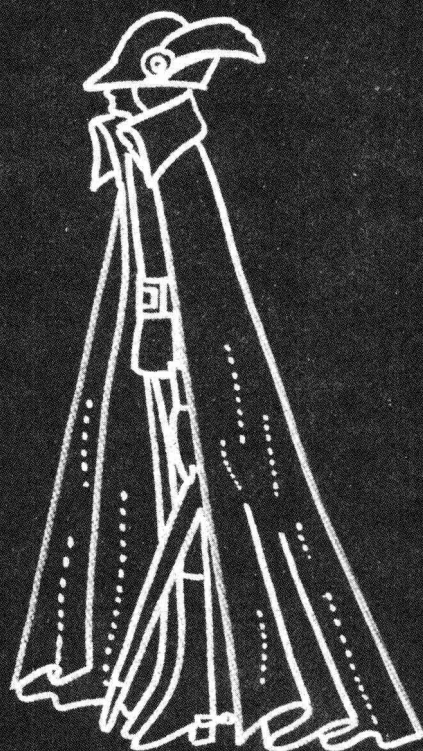
PART I

夜霧の騎士

いくらか

S・F的な

14のおはなし



夜霧の騎士

その夜は非常警戒がしかれていました。要所要所には警官がたつていて、水ももらさぬ警戒ぶりです。

時としてするどい呼笛よびこの音が夜の静寂をやぶってきこえるのですが、そのあとはまたもとどおりのしずかな夜で、夜霧は牛乳を流したようにひくく地上を流れております。

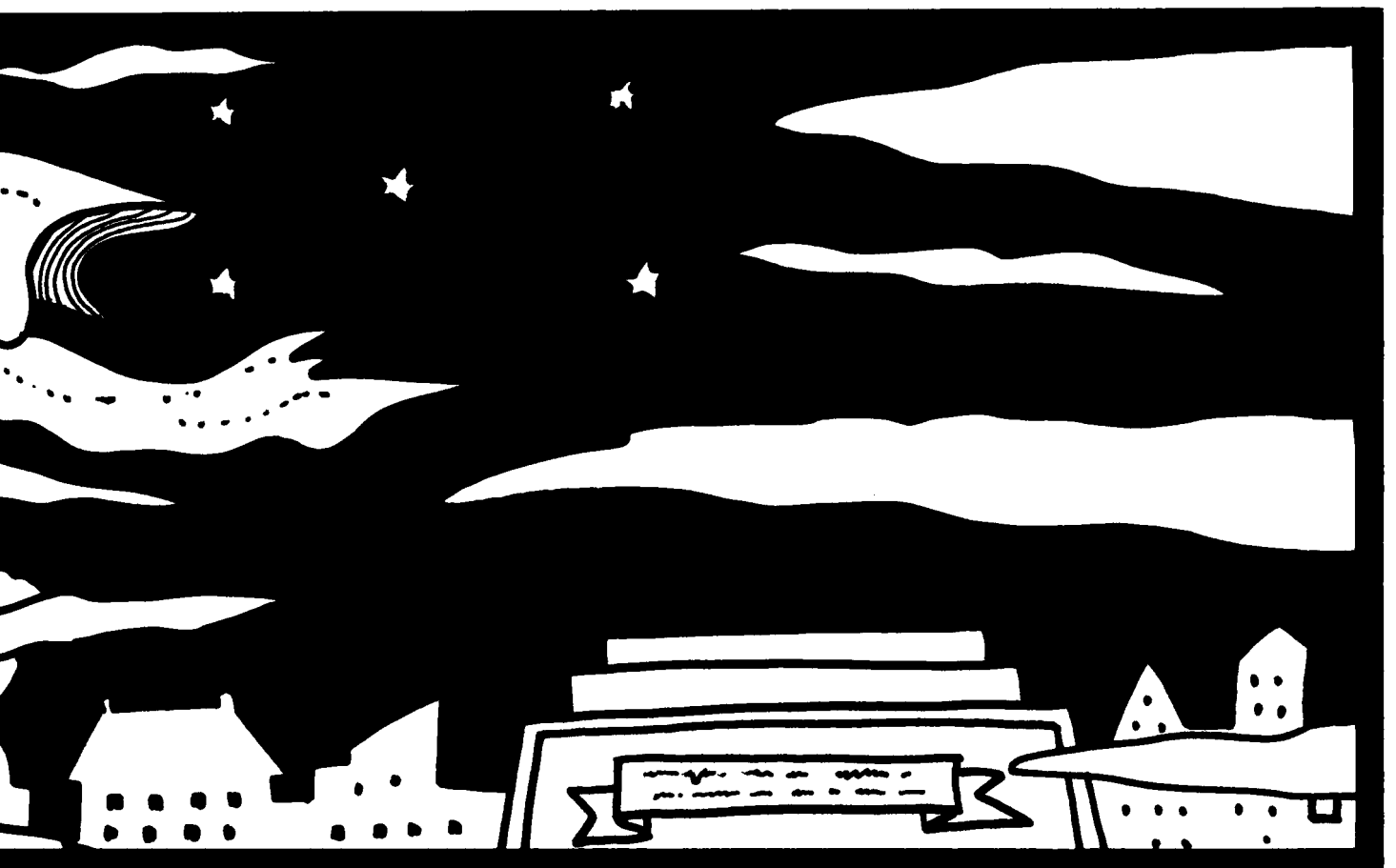
市庁舎前広場にある騎馬の銅像は、前肢を空中高くおどりあがらせたポーズのままシルエットになっています。

よくみると馬にまたがっている騎士のマントが夜風にはためいています。

はて？ いかに名作とはいえ銅像の騎士のマントが風にはためくはずがない。そう思っで一瞬眸をこらした時信じられないようなことがおこりました。

騎馬はさつとおどりあがると、台座をはなれて天馬のように空中高く舞いあがったのです。その時地上をはうように流れていた夜霧がにわかに湧きあがって視界をさえぎってしまいましたので、すべては渦まぐ乳白色の流れに隠されてしまい、いま自分の見たことが果して夢か幻か、それとも現実なのか、茫然としてぼくはただ一面のくもりガラスのようになったホテルの窓をみつめておりました。

その鉄のカーテンの中のちいさな国にぼくが旅行して、市



庁舎前の広場にあるホテルにとまったのは数年前の秋のおわりのことでしたが、その時の帰りの飛行場のチェックがものすごくきびしかったのは今でもよくおぼえています。なにしろ仁丹の瓶まで一粒ずつだしてしらべられたくらいですから。そして、その理由は日本へ帰ってからすぐにわかりました。その国の生んだ美貌の童話作家として、また画家として、ぼくらが敬愛してやまなかったT・R嬢が自由を求めて西側へ亡命したという記事が新聞にでていたからです。

しかし、なぜT・R嬢が厳重な警戒網を突破して国境を越えることができたかは、ナゾにつつまれたままでした。

T・R嬢自身が語るところによれば、眼がさめた時はすでに西側の公園にいたので、何もおぼえていないというのです。ふしぎなことにそこはリンデンバウムの梢の上だったのです。ちょうど鳥がとまるように木の枝で熟睡していました。

おそらく、軽気球による脱出ではないかという推理が新聞の解説には述べられていましたが、ぼくはそのときすぐに犯人の正体がわかりました。あの夜の市庁舎前広場の騎馬像「夜霧の騎士」のやったことにちがいありません。

ぼくの見たのは夢ではなかったのです。

ぼくはその国へ旅行した何人かのひとにあの騎馬像は今でもあるのかどうか聞いてみたのですが、みんな口をそろえて、市庁舎前広場にはもともと騎馬像の銅像なんかない。帝政時代たしかに古い騎馬像はあったようだが、それはもう五十年前も昔にこわされてしまったというのです。

でもたしかにあの夜……。



タイム・スイツチ

七十歳になろうとする老人と十八歳の少女が恋におちました。

前例がないわけではありませんが、やはり世間的常識からいえば不自然です。二人は悩みました。

老人は何かの研究に没頭していました。

見たところはあまり老人のようではなく、いつもジーンズ姿で口笛なんか吹いておりました。肉体的に年老いても心は少年のようでした。少女はそんな老人を愛したのかもしれない。

老人はある日少女にいました。

「どうしても私は君を好きでしかたがない。私たちはほんの少し時間がずれて生まれただけに本当に残念だ。私が二十歳なら誰にも君をわたさないのに」

少女は老人の胸の中で答えました。

「二十歳では若すぎるわ、あたし、もっと年とった方がいいのです。三十八歳ぐらいのひとのお嫁さんになりたいの。何をしてもあたしより上手で、あたしに教えてくれるようなひとでないと駄目なのです」

「三十八歳か。三十八歳なら、やってみようかなあ」

老人はふしぎなことをいいました。

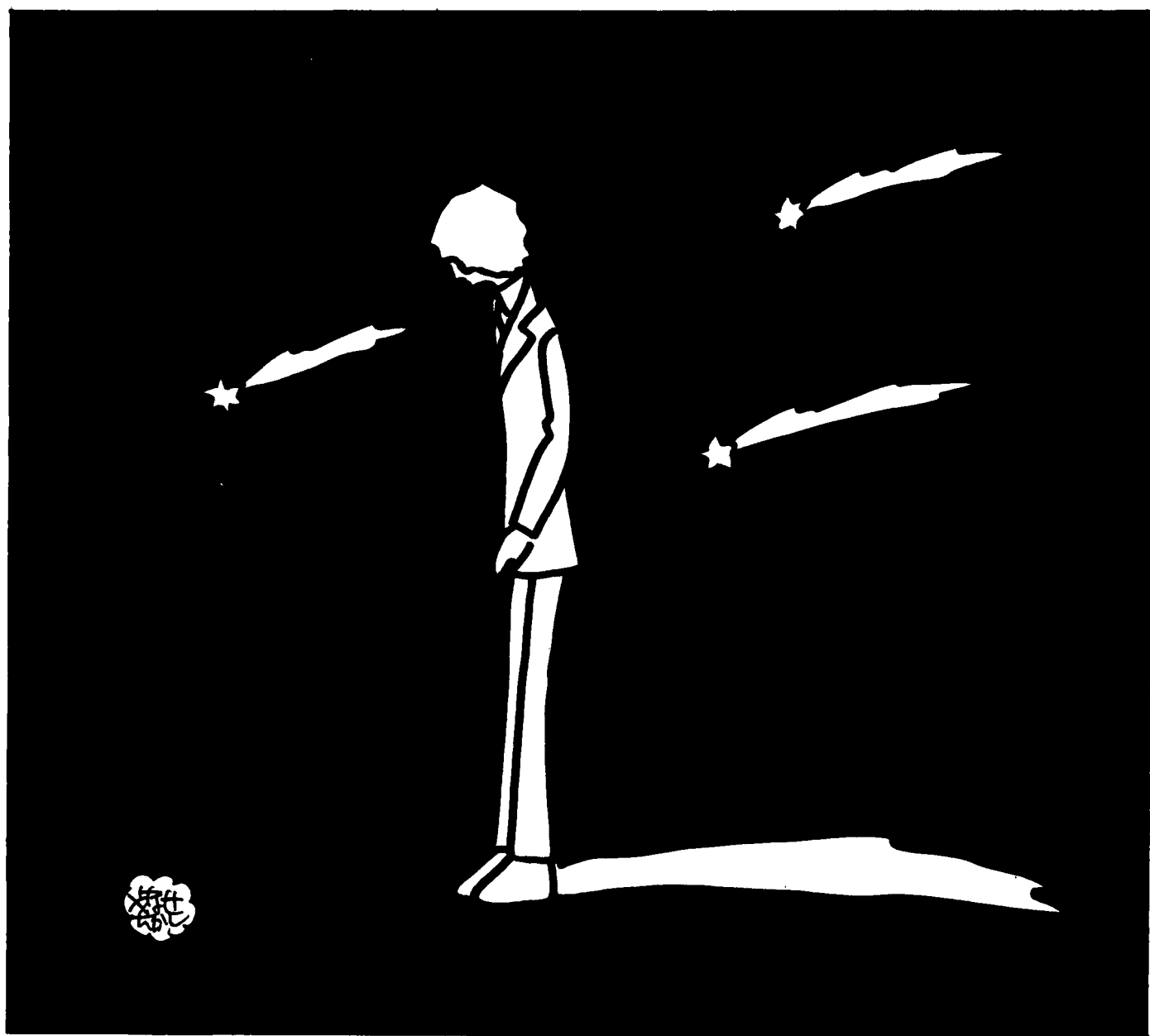
「やってみようかな」とはいいたい何をやってみるというのでしょうか。

老人は現在六十八歳でした。それ迄に何度も結婚に失敗し、たえず不幸でした。

老人はひどくロマンチストでしたから、たいていの女性は現実的で、この老人のすることが理解できず去っていきました。

ところがこの少女だけは、まるでひとりがふたつにわかれたように老人





と感情が適合しました。二人でいっしょにいるだけでうれしくて仕方がなかったのです。

☆

老人の研究というのは一種のタイムマシンでした。

タイマーを自分の帰りたい年代にセットしてボタンを押せばその時代に帰れるのです。

しかし、せいぜい三十年以内ということと、たった一度しかできないのが不便でした。しかし三十年以内ということは少女のいう三十八歳という年齢に限界ギリギリでまにあいます。たった一度という制限にはこわさもありましたが、老人は思いきってやってみることにしたのです。

三十八歳のところにダイヤルの目盛りをあわせ、眼をつむってボタンをおすと、ポン！という栓がぬけるような音がして老人は三十八歳になりました。

しかし、同時に少女も消えました。なぜかといえば老人が三十八歳の時には少女はこの世にいないのです。

もう一度灰色のつらい人生を三十年おくらせて、三十年めにやっと少女に逢える計算です。「人生は一度きり。二度やってみてもおなじなんだなあ」老人はこれからの三十年をおもい、暗然としながらつぶやきました。



セロリ4号消失事件

×月×日午後5時、キューカンバー高原を出発した小学生の修学旅行の団体の専用電車セロリ4号はその夜12時をすぎても終着駅に到着しなかった。

キューカンバー高原から終着駅トマトまではわずかに3時間半、8時半にはトマト駅に到着するはずだった。

それなのに最後の電車が駅についてもセロリ4号の姿はみえなかった。

いったい、これはどういうことなのだろう。高原列車はトマト駅まですべてくだりのゆるい勾配で、電車はすべるようにおりてくる。線路はひとすじ道で、支線に入る分岐点はない。セロリ4号の後続の特急 5号・6号がちゃんと到着しているのだから、どこかでセロリ4号を追いついたことになる。でも、一本の線路なら、セロリ4号を飛び越えなければならぬ。そんなことは不可能だから、セロリ4号はけむりのように消失したことになる。その夜は南西の微風、高原の空はぬぐったように快晴で、満天の星はいまにもこぼれ落ちそうに輝いていた。事故を思わせるような兆候はなにひとつなかった。

念のために全線に捜索隊がだされたが、セロリ4号は影もかたちもなかった。

☆

しかし、たったひとつ見落していたことがある。それは深夜のせいだったかもしれない。この高原列車は十年前、新しくレールを敷きなおしていて、まだ単線運転であった頃の旧線が、



ちようどキューカンバー高原とトマト駅の中間のあたり、トンネルをぬけたところに草に埋もれてそのまま残っていたのだ。それはもう誰にもみえなかった。線路にもいちめんに草がはえていた。しかし辿っていけば、そこには朽ちはてた駅とちいさな待合室がくずれそうになって残っていた。そしてひびわれたプラットホームの上には駅員がカンテラをさげてたっている。しかもそこにはあの消えてしまったセロリ4号が眠ったように黒く停車しているではないか。窓の灯は全部消えて、運転手も車掌もそして修学旅行の小学生たちもぐっすりと熟睡していた。

黒い影のようにみえる駅長は近づいてよくよくみれば人間ではなく老いた狸だった。狸はなにかつぶやいていた。

「もうわしらの時代は終わった。いまでは誰も狸の幻術など信じるひとはいない。そしてわしらの住むところもなくなった。しかし、自分の実力を一度ためしてみたかったのだ。

セロリ4号はみごとに消えた。乗っていたのが小学生だったから成功したのかもしれない。誰も拍手しなくてもいい。自己満足だけでわしは充分だ」

狸の駅長は古風なカンテラを振った。

いっせいにセロリ4号の窓に灯がとまり、まるで流星のように空中へ飛びあがった。

☆

深夜3時、トマト駅にいつのまにかセロリ4号はとまっていた。

だれひとりなぜ、しばらくの間セロリ4号が消えていたのか気づくひとはいなかった。

なにごともなかったのとおなじだった。

銀色のひと

ミヤコが道に迷ったことに気がついた時はもうおそかったのです。山はとつぷりと暗い夜につつまれていて、地をはうような夜霧が山羊歯の葉のギザギザにからまりついていました。

山を越えればすぐに港の町があることはわかっていました。ひさしぶりに故郷へ帰ってきたミヤコは子供のときもやはり、この山を越えた経験があります。のぼりはじめた時すでにたそがれはせまっていましたが、よくわかつている道のつもりでした。

ところが、どこかでまちがってしまったのです。それが夜のせいか、それとも、昔と少しちがった道が新しくついたせいかわ、樹林の奥深く迷いこんでしまったのです。

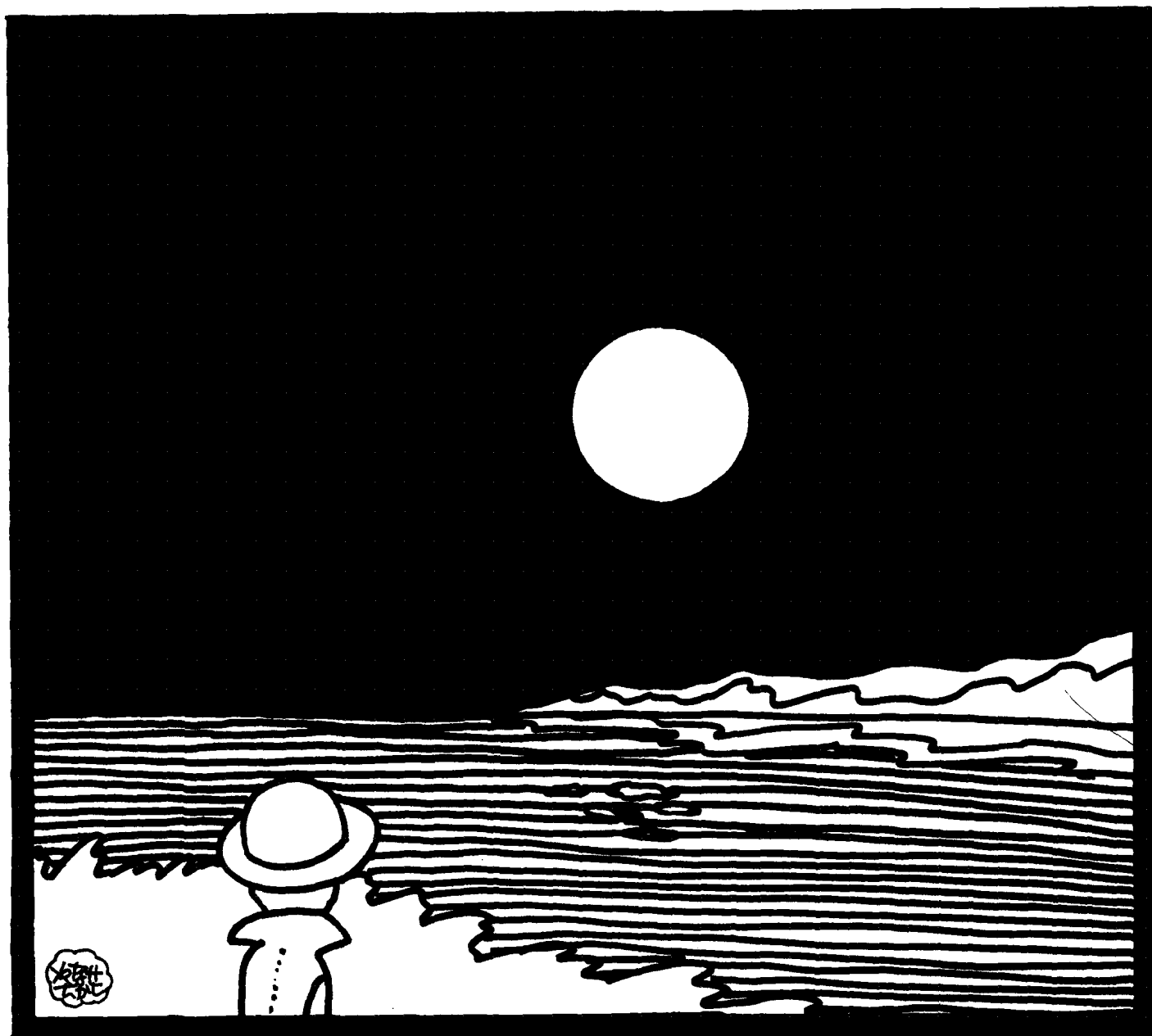
夜ふけの山道でミヤコは途方にくれました。あせればあせるほど方角がはつきりしないのです。それに何という暗さでしょう。

その時、原生林のむこうの方がぼおーっと明るくなりました。さして強い光ではありません。青白くにじんんでいます。

ミヤコはちょっとこわいような気もしましたが、とにかく光の方へむかっていきました。ところが光の方もミヤコの方へ近づいてくるのです。10メートルぐらいの距離になったとき、ミヤコはそれがとてもふしぎなひとであることに気がつきました。

銀色のマントにまるい銀色のヘルメット、その下のぴっちりとした身体にあったスーツも銀色でした。全体に燐光を発したように光っています。それはこの暗い山道でも、ぼおーっとまわりををらしてしていました。





「もしかしたら、空とぶ円盤に乗ってきた宇宙人、それであれば宣伝用のチンドン屋の仮装かな？」

その銀色のひとは10メートル以内には決して近づこうとせず、黙って自分についてこいというように手まねをしました。

ミヤコはその時、奇妙になつかしい感情が胸の底の方からこみあげてくるのを自分でもふしぎとおもいました。

いったいその銀色のひとは誰なのか、もしかしたら妖怪かもしれないのに素直にあとをついていく気になったのは、そのひとがおどろくほどの丸顔でかわいらしかったせいかもしれません。

そうやって歩いているうちにいつのまにか見おぼえのある峠にでました。峠からみると港町の灯はもう眼の下で、そのむこうには青黒く横たわっている海がみえます。

「ありがとうございますませんが道案内してくださいのね」

ミヤコが銀色のひとにお礼をいおうとした時、そのひとは急にうすれはじめるとふわあーっと消えてしまいました。

その消えた方向を眼でおって思わずミヤコは「あっ！」とさけびました。もうすでに夜は明けはじめていましたが、白みかけた山の端に今しも月がしずんでいくところでした。銀色のとてもやさしい丸顔の月が……。